

## ジッドとガストン・ソーヴボワ

吉井, 亮雄  
九州大学大学院人文科学研究院教授

<https://doi.org/10.15017/20567>

---

出版情報 : Stella. 30, pp.301-314, 2011-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

# ジッドとガストン・ソーヴボワ

吉 井 亮 雄

ガストン・ソーヴボワ（1880-1935）は、パリ入市税関の下級官吏として禄を食むかたわら、1907年頃から第1次世界大戦をはさみ、4半世紀にわたり少なからぬ新聞・雑誌に文芸時評を発表した。このうち大戦前後には、短期間ではあるが『新フランス評論』でも書評を担当した。執筆活動の初期には小説や詩の創作も試みたようだが、見るべき成果は残していない。また30年代初めには、当時の世情を映して、組合運動についての論文も物している。まとまった著作としては『自然主義以後——新たな文学的教義に向けて』（1908）と『古典主義の曖昧さ』（1911）の2冊。ほかに雑誌『昨日の肖像』シリーズの『ルイ・パストゥール』『ルコント・ド・リール』など、小冊子が数点<sup>1)</sup>。これらに紙誌掲載の論文・書評を合わせれば、それなりの分量の著述を残した批評家であるが、後述する1910年前後の「古典復興」の動きに関連してときおり言及されるほかは、<sup>こんにち</sup>今日彼の名が引かれることはまず稀である。

しかしながら『新フランス評論』の領袖アンドレ・ジッドがある時期、この批評家の論述を高く評価し、その知遇を得るのを強く望んだことは、同時代文学史の観点からももっと知られてよい。本稿では、ふたりが交わした書簡（現存の確認された4通、うち1通だけが既刊）の提示・紹介を第一義とし、あわせて『新フランス評論』をめぐる当時の文化的・政治的状况について若干の補説をくわえたい。

書簡による接触はジッドのほうから始まる。アンリ・ゲオン著『我々の方向』（1911年11月刷了）は、『新フランス評論』創刊号（1909年2月）のジャン・シュランベルジェによる巻頭言につづき、同誌グループの基本方針を敷衍した一書であるが、これを取り上げたソーヴボワの書評が交流の契機となったのである。1912年2月18日付の『独立批評』（週刊紙『人権』の「文芸付録」として月2回発行）<sup>2)</sup>でソーヴボワは、まずゲオンの主張を次のように要約する。す

なわち、フランス文学新生のためにはドイツの哲学やロシアの心理学など、外国の美質を我が国のそれと調和よく統合させるべきである、と。しかし批評家は、この主張に一定の理解を示しつつも、当然そこには価値の序列があつてしかるべきだ、と反論する。ゲオンが考える以上に芸術には社会的な問題が密接に絡んでくるのであり、フランスの作家は今や「ラテン的精髓と、政治的汎ゲルマン主義に支えられたゲルマン的精髓との激しく広汎な闘争」に無関心であつてはならない。重要なのは、「知性を下位の感受性や感傷性と同列におかぬ」こと、「今後醸成される新たなヨーロッパ精神において、フランスの寄与する知性こそが主要な役割を果たす」ことである……。議論の骨子は以上のとおりだが、そこに至るに先立ち、筆が滑ったのか、ソーヴボワはジッドやクロードルを囲む『新フランス評論』グループの面々を「追従者」と評していた。この一語を認めたジッドは、日をおかず釈明の書簡を送ったのである（なお、両者の書簡のうち、これまでに唯一公開された同書簡は作家自身が編纂に関与した NRF 版『全集』第 6 巻〔1934 年 4 月刷了〕に選択採録されたもので、このことから彼が事後もその重要性を強く認識していたのが分かる）<sup>3)</sup> ——

〔パリ〕1912 年 2 月 17 日

拝略

今朝の配達で『独立批評』がとどき、同誌掲載のご高論を大いなる喜びをもって拝読しました。ゲオンは明日〔居所のあるプレ＝シュル＝セヌから〕パリに出てきますので、彼にご高論を見せるのが楽しみです。

その善意ゆえにご高論を嬉しく思います。お説の大半に全面的に賛同いたしますが、それだけに、論中ひとつの瑕瑾を認め、これに少しばかり傷つき残念な思いをしております。

『新フランス評論』創刊時、我々編集陣は、この雑誌においては互いのことを話題にのせないと取り決めました。寄稿者たちにもそう告げていました。作品を掲載するだけで十分であり、作品そのものについては一切黙するのだ、と。このようにして『新フランス評論』は、〔クロードルの〕『人質』や〔ラルポーの〕『フェルミナ・マルケス』などと同様、拙著『狭き門』『新プレテクト』あるいは『イザベル』についても論じることはありませんでした。仲間褒めはなし！これが我々の合い言葉だったのです。

しかし貴方さえもが、こともあろうに我々を追従者と呼び、だが結局のところ「誰が家では一国一城の主なのだ」と留保を付して大目に見ようというのであれば、我々の立場はいったいどうなってしまうのか。

我々の公平な態度は突飛すぎ、奇抜がすぎて、信じてはもらえぬものなのでしょう。私が貴方の書かれたこの一文を危惧する所以です。宣伝を嫌う方針を守って吹聴

もしないので、我々の慎みが気づかれることはまったくありません。我々の沈黙は評価されず注目もされず、また理解されることもないのです。若い人たちが集い（私はもう自らを「若者」とは思いませんが、もっと若い人たちが私のまわりでグループをなしているのは周知のとおり）、結果として、仲間褒めをする。こういったいささか不遜な態度ほど、文学的な良識に照らし、腹立たしくも非難すべきものはなく、また我々を嫌悪させるものもない、それだけに敵対者たちの声がいっそう大きく聞こえてくる……。私はこのようなあれこれを自己弁護のために書いているわけではありません。それどころか、相手の共感（私の言わんとするのは賢明なる共感）を望むだけになおさら真正面から受けて立ちたい敵意というものがあります。『独立批評』あるいは『人權』が我々のことを誤解するのを放っておけぬのもそのためなのです。敬具。

アンドレ・ジッド

むろんのこと、貴方が次のようにお書きなのはこの上なく正しい——「新たに生まれいずる文学においては、そしてそれがフランス的であるためには、知性が最重要であらねばならない」。だが、しかとお信じください、アンリ・ゲオンその人ほど貴方の文章に声高く喝采をおくる者は誰ひとりとしていないのです。

同様に、このラテンの精髓と汎ゲルマン主義との闘争ほど我々（特にアンリ・ゲオン）の関心を引く問題はありません……。しかし、まさにそれこそが我々の考え方の必ずしも一致しない点なのでしょう。さりながら……。

初期『新フランス評論』がその編集にかんし標榜した2大方針とでも呼ぶべきものがあつた。ひとつは党派性の排除であり、またひとつは外国文学の積極的な受容・紹介である。前者はただ芸術的な完成度のみを取捨選別の基準とするものであり、ジッドら創刊メンバーとは必ずしも文学的信条を同じくするわけではないクローデルの協力・寄稿を最優先に請うたのがその一例。上記書簡が述べるように、仲間内の論評は掲載しないというのもまた同様で、この原則は少なくとも初期の数年は厳格に守られる（後には少数ながら「新フランス評論出版」の単行書が論評の対象となる場合も出てくるが、そのさいも宣伝色を極力排するという姿勢は一貫している）。

第2の方針、外国文学の受容・紹介について——。『新フランス評論』は、先行誌『メルキュール・ド・フランス』のような、外国文学のいわば総花的・百科事典的な俯瞰の提供を目指していたわけではなく<sup>4)</sup>、中心メンバーや規則的寄稿者が個人的に抱く親近感や好奇心、あるいは多分に偶然に依存する人的接触をつうじ、そのつど臨機応変に外国文学を摂取していった。またそれによって外国文学にかんする同誌の言説は逆に硬直化を免れ、ある種の柔軟さを保ち

えたのである。「ラテン的精髓とゲルマン的精髓との闘争」、換言すれば「フランス的精髓とドイツ的精髓との闘争」にかんしても、同誌の姿勢は決して画一的なものではないが、まずは書簡記述の補説をかねて、当時の文化的・政治的状况に照らし議論の背景をごく簡略に述べておこう。

普仏戦争の敗北に危機感を抱いていた第3共和制は、新世紀の到来とともに、長きにわたり墨守してきた「古典人文教養」にたいする根本的な見直しを始める。ギリシア・ラテン語の学習と古典テキストの読解、またそれら古代古典の正統的継承者と位置づけられたフランス古典の習熟にかわって、言葉よりも事物を重視する、より実用的・現実的な「近代教養」へと舵を切るのである（文芸にかんしては、外国語を含む現代語によるテキストの読解・解釈に力点が置かれることになる）。そのさいに改革のモデルとなったのは、人文学以外の学術に長じるとされたドイツの研究教育方法であった。かくしてフランスの教育体制は、新世紀初頭、1902年の中等教育改革や、とりわけ、ランソン、セニョボス、デュルケームら「新ソルボンヌ」派による高等教育の強硬な改革によって急速に変貌したが、当然のことながら、これに反対する運動も激しさを増してくる。本稿冒頭で触れたソーヴボワの2著書、『自然主義以後』『古典主義の曖昧さ』はまさにそうした流れに属するもので、先述の書評と同様、フランスの価値の称揚、当時の鍵語をもちいて言えば「古典復興」の必要性をひたすらに唱っていた。

「新ソルボンヌ」にたいし最も激しい批判をくり広げたのはアガトンである。アガトンとはアンリ・マシスとアルフレッド・ド・タルドが共作のさいにもちいた筆名だが、ふたりは1910年、週刊紙『ロピニオン』の連載論文でパリ大学文学部の新たな教育方針を、ドイツの影響下、歴史的調査や伝記的・書誌的研究で事足りるとし、フランス的価値を支えてきた直感や審美眼を蔑ろにするものだと厳しく難じたのである。大戦を前に国際的緊張が次第に高まりゆくなか、論争は文化や政治の次元とも関連していた。そして翌11年1月、アガトンの批判論文をまとめた『新ソルボンヌの精神』がメルキユール・ド・フランスから出版されると<sup>5)</sup>、知識人たちの関心・危機意識はさらに高まる。『新フランス評論』グループの考え方は、フランス的価値を顕揚するという点では、アガトンのそれに近い。同年半ばには、ジャン・リシュパンを議長に仰ぎ、アカデミー・フランセーズ会員の大半を擁した知識人同盟「フランス文化のために」が結成

されるが、その幹事を務めたのはマシスとタルドの両名であり、執行委員・活動委員にはジッドやシュランベルジェ、ジャック・リヴィエールらが名を連ねていたのである。

だが、『新ソルボンヌの精神』の書評を依頼したアルベール・チボーデが、予期に反して同書批判の原稿を寄せたさい、ジッドらはこれを拒絶するのではなく、むしろ「論文」へと格上げし、同時に創刊メンバーのひとりミシェル・アルノーによるアガトン擁護の文章を併載して賛否両論の均衡をはかる<sup>6)</sup>。この事例が象徴するように、『新フランス評論』は、編集にあたり党派的選択を排する点では一貫していた。「ドイツ的精髓」にたいする対応もまた然り。上述のように、国籍・民族の如何にかかわらず、芸術的完成度の高いものを斥ける根拠なぞありえない、というのがグループの基本的了解であり、じじつ、諸外国のなかでも彼らがとりわけ熱い関心を示したのは、ほかならぬゲーテやニーチェ、リルケ、ホーフマンスタールらに代表されるドイツ語圏の文学や思想だったのである<sup>7)</sup>。

さて、ジッドからの釈明を受けた4日後、ソーヴボワは「誤解」を解こうと次のような書簡を返している<sup>8)</sup>——

パリ、1912年2月21日

拝略

『新フランス評論』は決して執筆者たちのための宣伝誌にはあらず、この事実をご親切にも喚起していただき、まことにありがとうございます。私の賛意は、同誌の努力について語る機会が与えられたさいに喜んで貴方にお示しいたしましょう。

貴方もご存じの『レ・マルジュ』誌掲載の〔ジョルジュ・ル・カルドネルの〕論文に関連して<sup>9)</sup>、私は次のように述べていました——「しかしながら私は、追従者たちが見境なしに彼ら〔ジッドやクローデルら〕を褒めちぎっているとは思わない」と。明らかにその時、私の念頭には、雑誌〔『新フランス評論』〕だけではなく、その執筆者たちが単行出版する論考のことがありました。言ってみれば、それは貴方がたを擁護するものだったので。そして私は次のように付言していました——「彼らを非難できるとしても、それは精々のところ、密かな排他主義といった程度のことにはすぎぬ」。これに続いたのが、「しかしながら忘れてならないのは、誰もが家では、云々」なる一文だったという訳です。

したがって問題は単なる誤解であって、私としては以後そのようなことがないように努めましょう。どうか意のあるところをおくみとりいただきたく。私の善意はほとんど誰の目にも紛うかたなきものだったので。

『新フランス評論』の努力を熱心に見守っています。そのことは拙論が示すところで

す。何度でも話題にとりあげ論じようとさえ決めているのです。我々は（私が言うのは「文学」に尽くす者たちのことですが）互いに己の意識を深く照らし出すべき時に来ています。新たな精神の涵養とはなかなか微妙な事柄であり、それだけに私の考えるところでは、貴方のグループと私とのあいだでの問題は、論争ではなく、むしろ焦点の明確化なのです。

『人権』紙への執筆のために『新フランス評論』には定期的に目を通しています。おかげさまで、同紙では何度か引用させていただきました。

なんらその権利もない者たちが濫用するのを知っているだけに、貴方がたの出版物のプレスサービスを私宛にとことさらお願いするつもりはありません。しかしながら、もしもプレスサービスがいただけるならば、まことにありがたいことです。紙面のよい場所を使い、いつでも心から進んで、それらの本を論じましょう。導きとなるような書物は稀でありますから。敬具。

ガストン・ソーヴボワ  
パリ 11 区、パッシュ通り 9 番地

『ジッド＝リヴィエール往復書簡集』（1998 年刊）の校訂者は、集中のある書簡に注記して、『独立批評』掲載の書評が原因で「ソーヴボワは『新フランス評論』と対立・衝突関係にあった」と述べるが<sup>10</sup>、彼とジッドのやりとりを見るかぎり、この評言は明らかに誇張が過ぎよう。

ジッドは「新フランス評論出版」の刊行物をソーヴボワにも献本するよう取り計らったと推測されるが、やがて彼の連絡先を失念してしまう。6 月 30 日付ジャック・コポー宛書簡には次のように記されている——「私が是非ソーヴボワに手紙を書きたいと思っているのはご存じのとおりですが、彼の住所（あるいは〔寄稿先の〕『レ・ドキュマン・デュ・プログレ』誌の住所）を問い合わせたりヴィエールからは返答がありません<sup>11</sup>）。この時点でジッドが批評家になりたいかなり強い関心を抱いていたことは疑えない。また、同年内の接触を証する決定的な資料は確認されていないが、後掲の翌 13 年 3 月 20 日付ソーヴボワ宛書簡の冒頭文「貴方が予告なさって以来、ずっとご高論〔＝ジッド論〕を待ちわびていました」は、その間の新たなやりとりを踏まえたものである可能性が高い。

ソーヴボワは 1912 年 11 月、挿絵入り月刊誌『スカンジナビア評論』でふたたび『新フランス評論』の活動について論じた。グループの目指すものは「古典主義」（あるいは「新古典主義」）であると述べて、その達成の実例として『狭き門』などジッドの近作を挙げている。そして「すでに私はアンリ・ゲオン氏

の著書『我々の方向』に絡めてこの問題を扱ったので、今日はそれについては立ち戻るまい」と述べながら、ここでもやはりフランス的知性の重要性を説くのである——

〔『新フランス評論』が実現に努めている〕古典主義は、いまだ分離した3要素、すなわち、特にロシア芸術において発展した感受性、ドイツの芸術の特性たる神秘的感傷性、そしてフランスの寄与たる知性の融合を進めようとするものだ、そう述べておけば十分である。私がこれら3つの特性の融合について若干の考えを表明し、良き混淆を導きだすには知性が他の2要素に勝るべきだと説いたさい、アンドレ・ジッド氏は私に、それこそが氏自身の考えであり、またゲオン氏の考えだにご返答くださった。<sup>12)</sup>

この論文がなんらかの契機となったのだろう、『新フランス評論』は翌年3月号で初めてソーヴボワ執筆の書評を掲載する（対象本はアルフレッド・カピュ著『時代の風習』）。その直前の2月21日付リヴィエール宛書簡の文面から推すかぎり、若き編集次長に批評家を推薦したのはまず間違いなくジッドその人であった——「この書評はとてもよく書けているし、私としてはそれが『新フランス評論』に掲載されるのは喜ばしい」<sup>13)</sup>。

こうして書評欄へのソーヴボワの寄稿は、大戦勃発により雑誌が同年8月号をもって休刊するまで、ほぼ隔月のペースで計9回に及ぶが、その間作家との関係で注目すべきは1913年3月、アポリネールもかかわった『悦ばしき知』<sup>かん</sup>誌の創刊号にかなり本格的なジッド論を発表したことである。同論は次の一節で始まっている——

巷間ひとの言うがごとく、いかに多様で奇妙・複雑な存在に見えようとも、アンドレ・ジッドはつねに変わることがなかった。私が言わんとするのは、彼の姿は初期作品においてすでに認められること、『狭き門』もまた『ユリアンの旅』と同じ署名を冠するものであること、そしてこの驚嘆すべき作家は類い稀な一貫性・統一性の模範例を、したがってとりもなおさず類い稀な誠実<sup>プロピテ</sup>の模範例を示しているということなのだ。<sup>14)</sup>

そして初期作品から近年の『背徳者』や『狭き門』へと至る軌跡を追いながらソーヴボワがジッドのうちに改めて確認するのは、自らの内奥への飽くなき探究を支える、変わることなき強靱な真摯さである——

理解すること、つねに理解すること、これこそが彼の基本的な願望である。彼は、己が理解しえぬ生を生きようとはしなかった、すなわち […] どのような関係によっ

で自分自身や世界に結ばれているかを感知できない生なぞは一度として生きようとはしなかった。つねに知的であり、厄介きわまる意識の分析にも似た、初期作品の数多の探究はそこに由来するのである。理解しようというこの意志のうちに人々は偉大な誠実オネトテを認めることであろう。<sup>15)</sup>

ジッド学において「誠実」サンセリテはすでに専門的術語として確立しているが、引用文中の«probité»や«honnêteté»は言葉こそ違えど、これと同一の概念を指すことは断るまでもない。聖俗・霊肉のあいだを揺れ続ける生き方や作品ゆえの「変節漢」呼ばわりに終生苦しめられたジッドにとって、その揺れのなかにこそ「一貫性・統一性」を認め、「誠実」の証を見いだしてくれる批評は、稀有なだけになおのこと貴重な報奨であったろう<sup>16)</sup>。

おそらくジッドはソーヴボワに礼状を送ることはなかった、これまではそう推測されていた。現物の存在が未確認だったためである。だが、けっしてそうではない。パリ大学附属ジャック・ドゥーセ文庫は、いかなる理由によるのか、1913年3月20日付のあるジッド書簡を今日まで詩人のアンドレ・サルモン宛として整理・取蔵してきたが、これこそが疑いなくソーヴボワに送られた礼状なのである。そう断定しうる根拠は次のとおり——。まず第1の根拠は、書簡でジッドは自分について書かれた論文に礼を述べ、是非とも文通者と面識を得たい旨を記しているが、サロモンはこれまでも、またこれ以後もジッド論を物することはなく、しかも『詩と散文』誌（ポール・フォール主宰）の秘書として、遅くとも1907年5月の時点ですでに作家とは知り合っていたこと。第2の根拠は、論文掲載の時期と書簡送達のそれに対応するばかりか、書簡には、評者が自作の「連続性」を示し「誠実」オネトテを認めてくれたと、ソーヴボワ論文の主旨に完全に符合する文言が記されていること、である。もはや贅言は無用、早速ジッドの礼状を訳出・提示しよう<sup>17)</sup>——

キュヴェルヴィル、1913年3月20日

拝略

今や貴方に打ち明けないでおれましようか。貴方が予告なさって以来、ずっとご高論を待ちわびていました。

大きな喜びをえられると期待してはおりましたが、ご高論が私にもたらしたのはその期待をはるかに超えるものでした。思うに、かくまで私を満足させるもの、これほど私自身をそこに認めうるような描写ポルトシは、今まで唯のひとつも目にしたことがありません。

私の各著作の連続性をこのようにお示しくださったことになんと感謝しております

ことか。ご高論のおかげで、自作の各々を結ぶ秘所を私自身がしっかりと把握できたと申しあげたいのです。

また、私の著作の「誠実」<sup>オネトラ</sup>を照らし出し、それが非常にしばしば言われるのとは逆に、ひとの意気を挫き萎えさせる不毛なものなどではないとお示しくくださったこと、これについても深く感謝しております。私の作品は精気を掻き立てうるものと思いたい。その証を時おりいただくことこそが私にとっては最も貴重な褒美でした。というのも私は、精神を失意へではなく歓喜へと導きたいと願っているからです。

そして今や、なんとしても貴方の面識を得たい、そう申しあげずにおれましようか。2週間後には帰京の予定です。その折りにお目どおり願えるでしょうか。敬具。

アンドレ・ジッド

ちなみにジッドはこの書簡の4日前、シュランベルジェに宛て次のように書いていた——「コポーがテオ〔ヴァン・リセルベルグ〕の家で擲揄していたけれども、ソーヴボワのこの論文は、私が読んだ論文のなかで最も優れた最も炯眼なもののひとつであることが分かった」。両作家の『往復書簡集』の校訂者は、当該論文を『独立批評』3月1日号掲載の書評（対象本はジュール・ロマン著『頌歌と祈り』）であろうと推測するが<sup>18)</sup>、ソーヴボワ宛書簡中の讃辞、「かくまで私を満足させるもの、これほど私自身をそこに認めうるような描写は、今まで唯のひとつも目にしたことはありません」との最上級表現の共通をとらえれば、むしろ先のジッド論であった可能性のほうが高いのではあるまいか（「書評」ではなく「論文」という呼称の使用もそのことを示唆しているように思われる）。またジッドは帰京後の面会を望んでいたが、実際にはこの春先に両者が相見えることはなかったはずである。というのもジッドは予定を繰り上げ3月25日にはキュヴェルヴィルからにパリに戻るが、早くも翌々日には南仏に下り、4月に入るとイタリアへと向かい、彼の地に6週間ほど逗留したからである。

同年5月から翌1914年2月にかけて、ジッドはソーヴボワの書評掲載にかんしリヴィエールに何度か意見や指示を書き送っている。たとえば1913年11月13日には、原稿の量が不十分でないかぎり彼の書評は載せるべからず、載せるにしても原稿の第1頁末尾まで、と厳しい評価<sup>19)</sup>。また翌月15日には新たな原稿について、採るべしとの判断を伝えながら、次のように付言している——「かなり聞き分けのよさそうな人物なので、もし貴君がたまたま出会うようなこと<sup>ランコントレ</sup>があれば、彼と話をしてみるとよいだろうし、私が会いたがっている<sup>ヴォワール</sup>と伝えてもらってもかまわない」<sup>20)</sup>。文面からはジッドが遅くともこの時点ではソーヴ

ボワと面識があったことが窺われる。さらには翌年2月11日付書簡の一節――

ソーヴボワの書評に目を通しましたが、お手紙で前もって知らせていただいたので、懸念は徐々に消えていきました。貴君の仰ることは正当です。しかしながら、これらの書評をつき返すに足るほどには論点が明確ではありません。いずれにせよヴァリオ著の書評は悪くないだけに、手紙の説明では誤解を招きかねません。直接彼と話をするほうがよいでしょう。私が見るところ彼は十分に柔軟な人物であり、我々の仲間たるのを喜んでいるので、愛想よい態度を示すでしょう。もっともそういった愛想よさには自尊心をくすぐられるだけに要注意。というのも、まさしく我々が望むのは妥協や服従よりも社の基調だからです。<sup>21)</sup>

それから暫くおいた冬も終わりの頃、ジッドは近作2冊をソーヴボワに献呈した。これにたいする礼状が、ふたりの往復書簡のうち現存が確認された最後のものである<sup>22)</sup>――

パリ、1914年4月1日

ご高著2冊、『重罪裁判所の思い出』『歌の捧げもの』をご恵投いただきながら、もっと早くお礼を差しあげず、申し訳ありませんでした。近いうちに『人権』紙の文芸欄全面を割いて両作品を論ずることができるだろうと思います。そこのほうが手紙よりも率直に意見を述べられるでしょうから。ひとが最も厳密に誠実な態度を示すべきなのもまた、一般読者に向けた書き物においてではないでしょうか。というのも、私はこの上なく作家の倫理的責任というものを信ずる者のひとりだからです。

しかしながら、どれほど私には貴方の作品を愛する理由があるかということもご存じのとおりです。

ご高著そのものと、それをご恵投くださったことに二重の感謝の念を覚えつつ、御作のなかにさらに新たな理由をいくつも見いだしました。敬具。

ガストン・ソーヴボワ

パリ、パッシュ通り9番地

『重罪裁判所の思い出』は、ジッドが6年間の待機の後、1912年に陪審員として体験した重罪裁判の記録で、20年代後半の『フエ・デ・ヴュー雑報欄』連載や、『ボワチエ不法監禁事件』『ルデュロー事件』（ともに1930年刊）など、市井の荒々しい現実を見すえた著作群の先駆けとなった一書。また『歌の捧げもの』は言うまでもなくタゴールの代表作で、ジッドによる仏語訳は百年をへた今日でも定訳として広く流布している<sup>23)</sup>。書簡で述べるようにソーヴボワがこれら2著を実際に論じたか否かは残念ながら未詳だが、少なくともジッドが生前、新作発表のたびに情報収集の専門業者「アルゴス」に依頼して集めた約3,500点の論文・書

評（現在はジャック・ドゥーゼ文庫所蔵）のなかには、それらしきものは見あたらない。後述の『ラ・ヴィ』誌掲載論文のなかに『歌の捧げもの』への言及（2段落）がある程度である。

これに続く第1次世界大戦中の交流を証する資料・証言は、筆者の承知するかぎり皆無であるが、戦後『新フランス評論』が復刊されると、ソーヴボワにもふたたび声がかかり、再開第4号に当たる1919年9月号にはアルフォンス・モルティエ『犠牲にされた世代の証言』の書評が、続く10月号にはジュール・ルナール『わらじむし』のそれが掲載された。だが彼の寄稿はそこで終わりとなり、以後その名が同誌の表紙を飾ることはない。具体的な経緯は不明だが、「古典復興」の機運が大戦勃発とともに急速に衰えて、ひときわ声高くこれを説いてきたソーヴボワの批評言説がそのインパクトを大きく減じたこともおそらくは原因のひとつであったろう。戦火をへて間もない、いまだ政情不安なフランスには、かかる呼びかけに応じる余裕はもはや残っていなかったのである。

戦後の同時期、ソーヴボワは2度機会をとらえてジッドを好意的に評している。まずは1919年（発行月未詳）の『ラ・ヴィ』誌上で、処女作『アンドレ・ワルテルの手記』から『狭き門』や『イザベル』『法王庁の抜け穴』にいたる作家の足跡を手際よく追ひ、その旺盛な創作活動を称えた。次いで『新フランス評論』から退いたのち、『文芸生活』1920年10月号で『田園交響楽』を取り上げている<sup>24)</sup>。特に後者は、30点をこえる当時の書評のなかで、ジッド自身がチポード、シャルル・デュ・ボス、フランソワ・ル・グリの論評と並んで最も優れた読解と認めたものであった<sup>25)</sup>。その一節を引こう――

アンドレ・ジッドが蘇らせた方法は古典的な方法にはかならない。[...] その主題を描くにさいし、ジッドが採ったものだけではなく、採らなかつたものにも注意を払うのはおそらく無駄なことではあるまい。ここには風景や室内の描写はなく、また感情の吐露もないのだ。[...] 重要なのは、不純な要素をあまりに盛り込みすぎて、実際には体をなさなくなったジャンルに、真実の――そしてフランス的な――形式を取り戻すことだ、そうは考えられないだろうか。この問題について、いつの日か新たな論争が起ころのではないか。そしてそれこそは真に有益な論争となるのではあるまいか。

このように述べたうえで、論者は『田園交響楽』が「現在の小説概念にたいす一種の糾弾」であれかし、と結んでいた。

だが高い評価を下したにもかかわらず、翌年1月のデュ・ボス宛書簡の記述

によれば、ジッドがソーヴボワに礼状を送ることはなかった<sup>26)</sup>。そればかりか筆者の知るかぎり、日記や回想録、また既刊・未刊を問わず現存の確認された書簡のいずれにおいても、以後ソーヴボワの話題がジッドの筆に上ることは一度としてない。いかなる人間関係の機微によるのかは詳らかでないが、こうした状況から見て、両者の交流が大戦後数年にして急速に途絶へと向かっていったことだけは間違いあるまい。

## 註

- 1) Gaston SAUVEBOIS, *Après le Naturalisme. Vers la doctrine littéraire nouvelle*, Paris: Éd. de «L'Abbaye», 1908; *L'Équivoque du Classicisme*, Paris: L'Édition Libre, 1911; *Louis Pasteur*, «Portraits d'Hier» n° 34, 1<sup>er</sup> août 1910; *Leconte de Lisle*, «Portraits d'Hier» n° 40, 1<sup>er</sup> novembre 1910, ちなみに『古典主義の曖昧さ』は、版元住所が著者の自宅であることから自費による出版と推測される。
- 2) Gaston SAUVEBOIS, «Lettres: *Nos Directions* par Henri Ghéon», *La Critique indépendante*, 18 février 1912, p. 2. なお『独立批評』当該号の第1面右肩には極小活字で「2月18日」と打たれているが、通常の発行日は毎月1日・15日であること、またジッドの元に郵送で届いたのが同月17日であったことから鑑みて、「2月15日」の誤植という可能性も否定できまい。
- 3) Lettre reproduite dans les *Œuvres complètes* d'André GIDE, t. VI, Paris: Éd. de la NRF, 1934, pp. 472-474.
- 4) 隔週誌『メルキュール・ド・フランス』には、ドイツ、イギリス、イタリア、スペイン、ポルトガル、アメリカ合衆国、スペイン系中南米、ブラジル、近代ギリシア、ルーマニア、ロシア、ポーランド、オランダ、スカンジナビア、ハンガリー、チェコなど、各国の文学の動向を伝える通信欄が常設されていた。
- 5) AGATHON [pseud. collectif de Henri MASSIS et Alfred de TARDE], *L'Esprit de la Nouvelle Sorbonne. La crise de la culture classique. La crise du français*, Paris: Mercure de France, 1911.
- 6) 拙稿「ジッドとチボーデ」、『ステラ』第29号、九州大学フランス語フランス文学研究会、2010年12月、13-15頁参照。
- 7) これに続いたのが、主としてヴァレリー・ラルポーの選択眼に導かれた、ディケンズ、メレディス、ハーディー、キプリング、ステイーヴンソン、コンラッド、H・G・ウェルズ、チェスタートンなどのイギリス文学である。
- 8) パリ大学附属ジャック・ドゥーセ文庫、整理番号 785.1, 未刊。
- 9) Voir Georges LE CARDONNEL, «Les Romanciers - Romain Rolland: *Le Buisson*

- ardent* [etc.]», *Les Marges*, n° 31, janvier 1912, pp. 28-29. この書評においてジョルジュ・ル・カルドネルはジッドとクローデルにごく短く言及しているが、その内容自体はソーヴボワの論述とさほど関連しているわけではない。
- 10) André GIDE - Jacques RIVIÈRE, *Correspondance (1909-1925)*. Édition établie, présentée et annotée par Pierre de GAULMYN et Alain RIVIÈRE, avec la collaboration de Kevin O'NEILL et Stuart BARR, Paris: Gallimard, 1998, p. 339, note 2.
  - 11) André GIDE - Jacques COPEAU, *Correspondance (1902-1949)*. Édition établie et annotée par Jean CLAUDE, 2 vol., Paris: Gallimard, 1987-88, t. I, p. 629.
  - 12) Gaston SAUVEBOIS, «Un Groupe littéraire», *La Revue scandinave*, novembre 1912. 頁数未詳（この論文の切り抜きはジッドが生前保存していたもので、現在はドゥーセ文庫の専用ファイルに保存されている）。
  - 13) GIDE - RIVIÈRE, *Correspondance, op. cit.*, pp. 372-373. ただし具体的な内容は不明だが、ジッドは査読段階で文中の「いくぶん辛辣で乱暴な3語」を自らの裁量で削除させている。
  - 14) Gaston SAUVEBOIS, «André Gide», *Le Gay Sçavoir*, premier fascicule, 10 mars 1913, p. 1. なお当該誌は一応隔月刊だが、徐々に不定期となり1914年5月の第6号で終刊を迎える。
  - 15) *Ibid.*, p. 9.
  - 16) 後年（1938年）のジャン・テクシエ（筆名ジャン・カバネル）のジッド論とそれにたいする作家の反応も同様の例として興味ぶかい。拙稿「ジッドのジャン・カバネル宛未刊書簡をめぐって」, 『ステラ』第28号, 2009年12月, 179-184頁参照。
  - 17) ジャック・ドゥーセ文庫, 整理番号7236.41, 未刊。
  - 18) Voir André GIDE - Jean SCHLUMBERGER, *Correspondance (1901-1950)*. Édition établie et annotée par Pascal MERCIER et Peter FAWCETT, Paris: Gallimard, 1993, p. 510.
  - 19) Voir GIDE - RIVIÈRE, *Correspondance, op. cit.*, p. 408. なお、これに先立つ8月ないし9月初め、ソーヴボワはリヴィエールにポール・スーデーの評論集 *Les Livres du Temps* の書評執筆を申し出るが、結局その任はゲオンに委ねられている (voir Jacques RIVIÈRE - Jean SCHLUMBERGER, *Correspondance (1909-1925)*. Édition établie, présentée et annotée par Jean-Pierre CAP, Lyon: Centre d'Études Gidiennes, 1980, p. 102)。
  - 20) *Ibid.*, p. 417. このとき採られた書評はおそらく次のもの—— SAUVEBOIS, «*La Vie et l'Amour*, par Abel Bonnard», *La NRF*, 1<sup>er</sup> janvier 1914, pp. 153-155.
  - 21) *Ibid.*, p. 437. なお文中で言及されるヴァリオ著の書評は『新フランス評論』同年5月号に掲載される—— SAUVEBOIS, «*Les Hasards de la guerre*, par Jean Variot», *La NRF*, 1<sup>er</sup> mai 1914, pp. 896-899.
  - 22) ジャック・ドゥーセ文庫, 整理番号7785.2, 未刊。
  - 23) この仏語版の成立事情については次の拙稿を参照されたい——「ジッドの『ギター

ンジャリ』仏語訳——翻訳から出版までの経緯——」, 『ステラ』第25号, 2006年12月, 113-125頁。

- 24) Gaston SAUVEBOIS, «Commentaires sur l'Art et la Littérature. À propos de *La Symphonie pastorale* (André Gide). Les Constructeurs», *La Vie des Lettres et des Arts*, nouv. série, n° 11, octobre 1920, pp. 224-233.
- 25) Voir la lettre du 14 janvier 1921 à Du Bos, reproduite dans les *Lettres de Charles Du Bos et réponses de André Gide*, Paris : Corrêa, 1950, p. 28.
- 26) Voir *idem*.